

堀江真理子とパリの仲間たち

ピアノ五重奏曲 Op.87 フンメル

ピアノ三重奏曲 ラヴェル

ピアノ五重奏曲 Op.114 D.667「鱒」 シューベルト



1998年6月4日(木) 6:45PM

会場：浜松市教育文化会館

主催：浜松音楽友の会

プロフィール

堀江真理子(ピアノ)

東京藝術大学在学中の1976年、フランス政府給費留学生として渡仏。1979年パリ国立高等音楽院ピアノ科、室内楽科をそれぞれ一等賞で卒業。さらに同音学院の大学院過程を修了。1978年ジュネーブ国際音楽コンクールでは銀メダル(1位なしの3位)併せて特別賞、並びにポール・ストレット賞を受賞。数々の音楽祭に招かれ、活発な演奏活動を行う。パリ室内管弦楽団と協演、フランス国民音楽協会のコンサートにも出演。日本ではリサイタルの他、数多くのオーケストラとも協演している。1993年から1995年まで8回シリーズでガブリエル・フォーレピアノ曲、室内楽曲全曲演奏会をプロデュースし大きな反響を呼んだ。さらにフォーレ生誕150年記念コンサートをパリで行い高い評価を受けた。プローニュ・シュール・メール国立音楽院ピアノ科教授を経て、現在日本大学芸術学部講師。

ルノーカピュソン(ヴァイオリン)

1993年、パリ国立高等音楽院ヴァイオリン科と室内楽科を一等賞で卒業。統いて同音楽学院大学院課程を卒業。1997年よりクラウディオ・アバド率いるギュスタフ・マーラー・ヨーロッパ交響楽団のソロ・コンサートマスター。

マルク・ヴィエイユフォン(ヴァイオリン)

1991年、パリ国立音楽院ヴァイオリン科と室内楽科を一等賞で卒業。同時に現代音楽の秀れた演奏に対しても賞が贈られた。同音楽院の大学院課程室内楽科卒業。現在パリ管弦楽団團員。

ミシェル・ミシャラカコス(ヴィオラ)

1977年、パリ国立高等音楽院ヴィオラ科と室内楽科を一等賞で卒業。1979年から1984年までフランス国立管弦楽団のメンバーとして活躍。現在パリ国立高等音楽院教授。

アンリ・ドゥマルケット(チェロ)

1986年、パリ国立高等音楽院チェロ科と室内楽科を一等賞で卒業。統いて同音楽学院大学院課程卒業。スケヴェニンゲン国立音楽コンクール第3位、パリ国際室内楽コンクール第1位、パウロ国際チェロコンクール第3位。

吉田秀(コントラバス)

1986年東京藝術大学音楽学部を卒業。1988年デビューリサイタルを開催しソリスト、室内楽等で活躍。東京藝術大学管弦楽研究部首席コントラバス奏者を経て。現在NHK交響楽団團員、東京音楽大学非常勤講師。



堀江真理子と
パリの仲間たち

MARIKO HORIE AND
HER FRIENDS FROM PARIS

● フンメル／ピアノ五重奏曲 Op.87

フンメルはベートーヴェンと同時代の作曲家・ピアニスト。300曲以上にのぼるあらゆるジャンル作品の中でもとりわけ自身が、名ピアニストということもある。ピアノ曲、室内楽曲に優れた作品を残している。ウィーン派ピアノ奏者の完成者であり、シューベルトからショパンに至る世代に多くの影響を与えた。

この五重奏曲はフンメルが42才の時の作品で、ピアノ、ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、コントラバスの編成で書かれ四楽章から成っている。作風は18世紀の古典派様式であるが、同時にロマン派の萌芽も見出すことができる。またピアニスティックな面では、ショパン、リストへと続く道を予感させる内容となっている。

第一楽章 アレグロ エリソルートアッサイン。自由なソナタ形式で書かれている。

第二楽章 アレグロ コン フォーコ。メヌエットと題されトリオをはさんで三部形式。

第三楽章 ラルゴ。カデンツァ頃のピアノパートに導かれアタッカで第四楽章へ続く。

第四楽章 アレグロ アジタート。フィナーレと題された終楽章は舞曲的な性格を持ち、短調でありながら軽快さと力強さを感じられる。

● ラヴェル／ピアノ三重奏曲 イ短調

1914年の夏にラヴェルは彼の故郷である、ビレネー山脈のサン・ドゥ・リューズへ避暑に訪れていた。この地でラヴェルはバスク地方の音楽を素材としたピアノ三重奏曲に取り掛かる。このトリオが着手されて間もなく、第一次大戦が始まり、兵役にあったラヴェルは最後の作品になるかもしれないこの曲を全力で書き上げたのであった。

全体としてこのトリオはラヴェルの第一次大戦以前の作品に見られる、ドビュッシーとも共通した叙情性、バランスの取れた形式感、中世の旋法を思わせる古代主義的な書法などが現れているが、鄉愁と叙情性の中に時おり現れる沈痛な暗さ、クライマックスに現れる不安感、焦燥感が間もなく戦地へと赴くことになるラヴェルの心境を反映している。

第一次大戦の経験はラヴェルに大きな衝撃を与え、大戦後のラヴェルの創作は大きな転換期を迎えることになる。

第一楽章 モデレ。バスク地方の音楽が反映しており、故郷への鄉愁に満ちている。

第二楽章 パントゥーム。アッセ・ヴィフ。ピアノのコラール風の響きの上に、スケルツォの細かな旋律が同時に演奏される。

第三楽章 バッサカイユ トレ・ラルゴ。ピアノの低音域から開始される五音音階の旋律がクライマックスまで繰り返され、やがてチェロ・ヴァイオリンを経てピアノの低音に帰っていく。

第四楽章 アニメ。民族舞踏的自由なロンド。ラヴェルの得意とする鮮やかな色彩感が現れており、ピアノトリオという古典的なジャンルに新たな可能性を示した楽章といえる。

● シューベルト／ピアノ五重奏曲 Op.114 D.667 「鱒」

シューベルトは貧しい人生を歩んだ反面、彼を生涯支え続ける友人に恵まれた。特に1817年、当時、非常に人気を博していた歌手ヨハン・ミヒヤエル・フォーグルは全く無名なシューベルトの歌曲を認め次々に世に紹介していく。1819年の夏、シューベルトはフォーグルの生まれ故郷であるシュタイアーハーと招待される。ウィーンの西に位置する古い町でシューベルトは彼の人生の中でも最も楽しい日々を過ごしたが、ハムガルトナーという裕福なアマチュア音楽家と知り合い、作曲を依頼される。彼は音楽サロン仲間とアンサンブルを楽しんでいたが、そのアンサンブルのために書かれたのが「ます」である。変則的な楽器の組み合わせが選ばれたのは、このサロンアンサンブルの編成に従つてのことである。(通常のピアノ五重奏はピアノ、ヴァイオリン2、ヴィオラ1、チェロ1) シューベルトの歌曲の大ファンだった彼は、お気に入りの歌曲、「ます」の旋律を用いてほしいと頼んだのであった。

第一楽章 アレグロ・ヴィヴァーチェ イ長調

全体の落ち着いた弦の響きに対し明るいピアノの高音が対称的な冒頭に続き古典的なソナタ形式が展開され、「ます」の特徴的なリズム、音程をもとに構成されている。

第二楽章 アンダンテ ヘ長調

この樂章では旋律素材が主に原曲のメロディから取られている。やがて現れるチェロとヴィオラによる旋律は恐らく原曲の第三フレーズの変奏と思われるが、まさにシューベルト特有の哀愁をたたえている。

第三楽章 スケルツォ・プレスト イ長調

原曲の伴奏のバスの繰り返し現れる音形を思わせる冒頭に続き、スケルツォは弦楽器とピアノとの対話、ダイナミックの対比、軽妙さなどが突出している。

第四楽章 アンダンティーノ ニ長調

原曲「ます」の旋律が明確に提示されそれに基き5つのバリエーションが展開される。

第五楽章 アレグロ・ジュスト イ長調

原曲より素材を得てソナタを構成している。歌曲では結局「ます」(といつても若い女の象徴だが)は巧妙な釣り人(つまりプレイボーイ)によってつり上げられてしまうのだが、終曲のエンディングは過度な華麗さとは裏腹に、一瞬の悔恨の瞬間をもって閉じられており、原曲の文学的な内容に見合ったものとなっている。

一般的にピアノ五重奏曲「ます」はサロン音楽として、余興的に書かれたという評価をされがちだが、素晴らしい変奏技法が駆使されており、シューベルトの残した交響曲の分野での大きな業績を理解する鍵となるだろう。ベートーヴェンとは対称的な柔軟な旋律素材の扱いこそ、メンデルスゾーン、シューマン、そしてマーラーへと続くもう一つのロマン派への源流であった。